



Title	「書けるようになるには」と聞かれて
Author(s)	寺沢, 浩一
Citation	高等教育ジャーナル, 12, 183-186
Issue Date	2004
DOI	10.14943/J.HighEdu.12.183
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28790
Type	bulletin (article)
File Information	12_P183-186.pdf



[Instructions for use](#)

「書けるようになるには」と聞かれて

寺沢 浩一*

北海道大学大学院医学研究科

Answering the Question, “How Shall I Be Able to Write?”

Koichi Terazawa**

Graduate School of Medicine, Hokkaido University

Abstract A student asked me how he would be able to write. Not a few students who are hoping to become researchers or academic staff members have anxiety about their writing ability. My answer to him is shown here as an essay emphasizing the following points. It is important for him to read whatever he likes and to have discussions with his friends based on his own experiences. He will become able to write if he continues to write and there is someone to read and check his compositions for a long period, more than a decade, for instance. He may still have anxiety, but if he continues to practice, I think he will surely be able to write good academic articles.

(Revised on February 12, 2004)

1. はじめに

一人の学生から作文(レポートや論文の作成を含む)に関して尋ねられたことに対して以下のように答えたことがある。こういう悩みをもっている学生も少なくないように思う。特に学者,研究者になることを考えている学生が悩んでいるように感じている。ご参考に供したい。

2. どうしたら文章が書けるようになるか?

君は文章が書けるようになるにはどうしたらいいか

と僕に時々尋ねてきたね。君は二十歳で大学二年生になったばかりだね。言語学や文学,哲学に興味をもっている君だから,僕のように理系の人間が書けるようになるのとは違った意味合いで書けるようになることをイメージしているのかもしれないね。でも僕も大学で学生を相手にして作文の指導のようなこともしているから,何かの参考にしてもらえるとあって,どうしたら書けるようになるのかをめぐっているいろいろ考えてみようと思う。

そういえば君は僕が文章を書ける人だと思っているようだし,僕も君に聞かれれば何か答えているから,自分でも書けると思っていることになるよね。

*) 連絡先 : 060-8638 札幌市北区北15条西7丁目 北海道大学大学院医学研究科

**) Correspondence: Graduate School of Medicine, Hokkaido University, Sapporo 060-8638, JAPAN

お互いにそう思うのが強くなったのは、やはり僕が本を書いた時からだね(寺沢2000)。ところがこれは編集者の方との協同作業の結果だったと思っているんだ。

草稿を見てもらうんだけど、話の展開上、抜けていること、不必要なことを指摘してくれたり、分かりづらい文章に?をつけてくれた。そういう箇所を書き直すんだけど、行き詰まってしまうと、例えばこんなふうにはいかかと助け舟を出してくれるんだ。ご本人がおっしゃっていたけど、素人の代表として読み、分かりづらい所を指摘してくれるんだ。

ある書き方の癖を気づかされて唖然としてしまった。それは僕が語尾に変化をつけないってことなんだ。三年経った今でも注意していないとこの癖が出るんだ。どの文章も「...である」とか「...だった」と書いてしまうんだ。たしかに論文を書くときにはこういう語尾で書くし、そう書いても査読者(論文内容をチェックする同じ分野の学者)に指摘されたこともなかった。語尾を変化させるとたしかに文章に躍動感が出て読みやすくなる。同じ語尾だと気持ちが悪くなる(気持ちが落ちついてくるという効果があるようにも感じはしているが)。

話をしている人を見てみると、聞き入ってしまうような魅力的な話をする人は語尾が種々に変化している。考えながら話すことと関連しているようだ。考えながら話をしていると聞き手、読み手は分かりやすいし、語尾は自然に変化するようなのだ。実際に考えているそのままの流れは相手に伝わりやすい、ということではないか。ああでもない、こうでもないと考える流れを提示する。それが分かりやすい文章の条件では、ということに気づかされたわけだ。

こういう指導を受けたのは自分には初めてだったと思う。小学生時代から作文の指導をされてきたけど、絵日記も遠足の報告文も読書感想文も、どれもいやだった。書くこと自体が楽しくはなかった。どうしてかは分からないが、もしかしたら書道の授業のときに朱墨で先生が直してくれた理由がよく分からなかったのと何か共通しているのかもしれないと思ったりする。指摘されれば、自分の書いたものにどこか非があるらしいとは思っても納得していなかった。いや、こういう時期も意味があるのかもしれない。書く目的がない時期、学ぶ必要を感じていないのに教えられてしまう時期が。

読書感想文を書くために読んだ本は、今でも緊張

感呼び起こすくらいに、読んででも理解できないのではという思いがまず湧いてきてしまっていた。国語の教科書も試験問題も同じ。それらに出てきた文章は楽しめなかった。しかたのないことだったのかもしれないけれど、こういうことに君も僕もつまづいてしまったのかなあ。他の人たちはどうなんだろう。なにかシコリのような心理ができていようだね。古傷みたいに。でも古傷なら、ケガをしないようになるコツも同時に覚えていたのかもしれない。このあたりは宿題にしておいてまた考えてみようか。

3. オリジナリティーがあるか?

君は書くことに苦手意識をもっているようだね。大学ではかなり長いレポートをよく書かされているようだし、それに対する先生たちのコメントは「良く書けている」というのが多いんだよね。それなら問題ないと思うんだけどね。年齢相応に書けていればいいと思う。

いろいろな体験をとおして感じたこと、そして見えてきたこと、それを人に伝えたくてくるよね。今日こんなことがあったんだよ、とか、このごろこんなことに気がついたり、考えているんだ、ということとは話したり、書いたりしたくなってくるよね。

もっとも、書いたものにオリジナリティーがあるかどうかは気になるだろうね。だれもが経験し、だれもが気づくことだからつまらないというふうに思ってしまうえば伝えようという気持ちも弱まってしまうかな。それとも誰もが同じように感じているよんだという安心感がわいたりして、かえって伝えてみたくなるかな。

オリジナリティーということになると、やはり経験を重ね、年を重ねることも必要かもしれないね。でも、その人にとって、オリジナリティーがあること、つまり日々の経験の中で気がついたこと、それはその人にとって意味があることだから、人に伝えたくて反応してもらいたくなるのは自然だね。同じ年代の人たちには伝えやすいかな。親しい人にも。

でももし広く世に問うというのであれば、不特定多数の人が読んで感心するようなことが書かれている必要があるよなあ。

研究を例にあげてみようか。研究論文にもいろいろあるけど、実験報告とか事例報告というようないわゆるレポートに近い論文であれば、若い学生でも

書けることがある。その中に何らかの新しい知見があることもあるから、それなりに価値があって、印刷されて公表されたりする価値が出てくる。ふつうは数年間の研究によって結果が出てくるから、大学院生になってから論文が書けるようになってくるね。

研究の内容も方法も多様だから、二十年以上も一つのことを続けてはじめて見えてくる事象もある。書けるためには、伝えるべき内容をもっているということが必要ということになるかな。あまりにも当然のことかもしれないけれど。

4. 書く人は読んできた人

書く人は読んできた人だというような言葉があるね。多くの人、とくに書く人がそのように言っているようだから、おそらくは本当なんだろうけど、読むことと書くことはどういうふうに関係しているのだろうか。

少し考えてみようか。

自分では経験できないことを読むことによって疑似体験できる、と言われるよね。疑似体験によって自分の頭の中にある考え方、ある感じ方の回路ができて、実際に経験したときほどではなくても、視野が広がるだろうね。塩の味の説明文をいくら読んででも塩辛い味自体は決して分からないだろうが、適度の濃さであれば良い味であり、濃すぎれば不快であることを知識とすることができる。その知識が何かの役に立つこともある。あることを選択しなければならぬ時に選択をすることができる能力にもつながる。他人の書いたものを読むことは力になりうる。

ちょっと脇にそれるけれども、自分の読みたいと思った本を読むことは大事だと思う。僕も君に特定の本を勧めることがあるが、本当は勧めてはならないと念じているんだ。頼まれぬ限りは。理由はなんにしる、その人が読みたいと思ったものを読むことが、その人にとってその時は大事なんだと。どんなに良い本でも、その人がその時に必要としていないものを読むことにはやはり無理がある。

家庭内で読書を良くする人がいると、勧めなくても子供も読むようになってきているようだ。とくに親がそうだとそうなると思う。子供が遊んで欲しくて親のところに来て本を読んでいて相手をしてもらえなくて最初はたぶん不満だろう。そのうち子供は読書を肯定的な対象と思うようになるのではなからう

か。

読む人は読むことを良しと考えていて、若い人にそれを勧める。読まない人は勧めない。読む習慣のついている人は読まずにはいられなくなる。読書人を集団として見れば、その人たちのうちで誰かが書かなければ自分たち、そして自分たちの後継者の読むものがなくなってしまう。もっと違う話、もっと別の書き方をする人のものも読んでみたいと無意識にも感じていて書くのではないだろうか。本を読む人は書く宿命を負う、ということにならないだろうか。オーバーかな。

5. 読み手を意識して書く

今の若い人は活字離れを起こしていると聞く。君はよく読むほうだと僕は思うけれど、テレビやマンガ、テレビゲーム、そして音楽の中で育ってきた世代が読書に割く時間が少なくなるのは当然だろう。君の親たち、僕の世代でもあるが、もテレビ、マンガと一緒に育ってきたから、その前の世代よりは読まないだろう。読まないから書かない、その結果、書けないということになってきたのかもしれない。僕も決してよく書けるほうじゃあない。

僕は大学でレポートや答案以外にも学生に作文を書いてもらって朱を入れている。日本語で正しく書けるためのトレーニングが社会の知的リーダーとなる人たちには必要だと思っているからだ。大学一年生が相手だ。原稿用紙に手書きで説明文や、感想文、エッセー、小論文を書いてもらう。ページを記入すること、段落を設けること、文法、書きことばと話しことばの違い、誤字や書き順の違いの指摘、似ている文字の区別（‘て’と‘へ’、‘ら’と‘5’、など）というような細かなことにも及ぶ。推敲せよ、ともよくコメントする。推敲されていない作文には重複があり、字が走っている。

どれも、読み手がいることを意識して書くことを求めているわけだ。もっとも、レポートを提出しても返してくれない、返されても何もコメントが書かれていない、という場合も多いらしく、学生もやる気をなくしている面もある。だから朱を入れて返却すると学生は食い入るように見ているし、真面目な学生は次の作文課題に力を入れて取り組むようになる。推敲され、ていねいに書かれた作文は評価する。自分で経験して気がついたことを書いてあれば、その箇

所にOKと記す。

学生の書く能力を高めるには、指導者がキチンと読み、それに反応することだと僕は信じている。書くことはコミュニケーションだ。相手の存在を意識して、相手の知的レベル、経験、年齢、立場などを把握して、理解してもらえそうな内容を適切なことばをつかって書こうとすることだ。書いたものをしかるべき人に読んでもらい、チェックしてもらうことだ。ここは分かりづらい、ここはこういう意味かな、ここはこんなふう書き直すと分かりやすい、というように。

コミュニケーション能力はコミュニケーションをとおして上達すると僕は思っている。僕のやってきた作文指導は相手に伝わる分かりやすい文章を書けるようになってもらうためだ(寺沢ら1997, 寺沢ら2001, 西森ら2003)。

6. まず、書く内容を持つこと

書けるようになるには、書いてみることに、それを読んでもらうことが必要だ。

それと同時に、というか、その前に書く内容を持つ(あたためる、熟成させる)ことだ。経験を積むことだ。書くこと自体も経験だ。やってみたいことを体験してみることに。疑似体験の読むことも有意義だ。読みたいと思うものを読むことだ。読めるというのは誰もができることではない。

あとは時間をかけること、年を取ることに。ゆっくりと待っていていい。早くいい文章が書けるようになりたいだろうが、これは一朝一夕にはかなわない。書くことに関して失敗と成功の経験を重ねていくしか方法はない。自分の目で見、耳で聞き、取材し、書き、読んでもらう。その繰り返ししかないのではと思う。そして十年、二十年。

君は読む人だし、書くトレーニングも相当に受けている。友人とも議論したり談話したりしている。興味をもって学校の勉強をやっている。趣味も楽しんでいる。そうやって経験を積んでいる。君は黙っていても書けるようになる。いや、すでに書きはじめているんだ。

こう言われたからといって不安は消えないのかもしれない。でもそれは君がその願望の成就に向かっていてからだと僕には思える。不安をもちながら進んでいけばいいんだ。それしかない。

参考文献

- 寺沢浩一, 阿部和厚, 牛木辰男(1997), 「作文添削の試み 一般教育演習「ことばと医学」から」, 『高等教育ジャーナル 高等教育と生涯学習』2: 243 - 256
- 寺沢浩一(2000), 『日常生活の法医学』, 岩波新書(新赤版687), 岩波書店(コミュニケーション能力に関して215 - 217ページで触れている)
- 寺沢浩一, 大滝純司, 阿部和厚(2001), 「作文の評価のし方をめぐって」, 『北海道医学雑誌』76(5): 349 - 360
- 西森敏之, 山下好孝, 寺沢浩一, 小笠原正明, 山岸みどり, 阿部和厚, 細川敏幸, 二通信子(2003), 「書く力」をつけるための指導 論文指導研究会報告」, 『高等教育ジャーナル 高等教育と生涯学習』11: 173 - 186 (北海道大学高等教育機能開発総合センター(編集・発行)(2002), 『はじめて全学教育を担当する人のための一般教育演習のガイドライン』の付録に取り入れられている)